『嵯峨日記』考

森川眞基子

元禄四年四月十八日から同五月四日にわたる、嵯峨落柿舎での出来事を綴った『嵯峨日記』は、作品として完成度の高いものではなく、芭蕉がこれを日記文学の手本として門人に示すべきものと考えていたとは思われません。乙州本『笈の小文』を別として、そこには、紀行文の範となすべく意図された「奥の細道」、あるいは「幻住庵記」等、他の作品と異なる目的が含まれているのではないかと思われるのです。これから、私が『嵯峨日記』を読んで、芭蕉がこの作品の中に表わそうとしているものは、こういうことではないだろうかと思い至ったことについて、述べてみたいと思います。それは、「笈の小文」にも関連することだと思われますので、そのことにも触れたいと思います。

松井忍氏[注1]は、「笈の小文」と「庚午紀行」（芭蕉の門人である各務支考刊の「本朝文鑑」所収）とを比較分析し、「庚午紀行」が芭蕉自身によって執筆された可能性を見い出そうとされているのですが、その論の中で、「庚午紀行」においては削り取られ、「笈の小文」に表わされているところ、つまり、杜国に関する記述を問題にしておられます。私は、『嵯峨日記』にも「笈の小文」同様、杜国に関する記述が認められることから、その点に注目して『嵯峨日記』を考えてみようと思います。

尾形仂氏[注2]は、「「笈の小文」は杜国に対する手向けぐさ、鎮魂の書として発企された、という想定が成り立つ。」と言われていますが、そのことについては後で触れることにして、ここで、先に「笈の小文」の成立について、考え方をはっきりさせてお

きたいと思います。

『笈の小文』の成立については、乙州編集説・未定稿説・芭蕉定稿説と諸説がありますが、簡単に申しますと、私は、まだまだ完成には程遠い未定稿であって、乙州の手が全く加えられていない、ということはないだろうと考えています。しかし、元になっているものは芭蕉の手になるものだと思いますし、乙州が、師の作品に対して、文章そのものを大きく変えるようなことはないと信じます。執筆年代については、『幻住庵記』の初稿と見られる『芭蕉文考』所収のものの中に、『笈の小文』冒頭部と酷似する部分が認められ、その『幻住庵記』末尾に「元禄三夷則下」とあることなどから、元禄三、四年にまで及んでいたものと推測されます。次に、この元禄三、四年という時期に注目してみたいと思います。まず、芭蕉が国分山にある幻住庵に滞在していたのが、元禄三年四月六日から同七月二十三日まで、落柿舎には、最初に書きましたように、元禄四年四月十八日から同五月四日までの滞在でした。幻住庵の滞在期間は、芭蕉の高橋喜兵衛宛の書簡によって明らかにされたものですが、幻住庵在庵を報じた元禄三年四月十日付の如行宛書簡について、尾形氏が興味深い見方をされていますので、ここにそのまま抜粋します。

当時、大津・膳所の間に身を置いていた芭蕉は、四月六日、幻住庵にはいって一夏の山庵生活を始めることになるが、四月十日付如行宛書簡によれば、入庵早々、かの『冬の日』の亭主役であった名古屋の野水が来訪し、一宿して帰ったことが知られる。伊賀の土芳の『庵日記』の元禄三年夏の条には、「いら子の杜国はかなくなり侍るよし、翁の方より卯月初聞ゆ」と見えるが、それはおそらくこの時野水によってもたらされた情報によったものであろう。すなわち、芭蕉の幻住庵生活は、野水によってもたらされた杜国の悲報をもって始められたことになる。かりに杜国の訃が野水によってもたらされたものでなかったとしても、芭蕉の幻住庵生活が杜国の死をいたむ悲しみの思いのうちに始められたであろうことには変わりはない。(注3)(傍点原文)

杜国という人は、元禄三年三月二十日に亡くなっています。彼は、『笈の小文』の旅で、万菊丸と名乗って芭蕉と行を共にした人であり、その人となりから芭蕉にこよなく愛された門人であったようです。尾形氏の説明を借りますと、

杜国、通称坪井庄兵衛は、尾張藩御用の米商人で、名古屋御園町の町代をも勤めたが、貞享二年(一六八五)空米売買の罪で、八月、尾張藩領追放となり、三河の畠村からさら

に保美村に移って、蟄居生活を送っていたのである。(中略)

この杜国の追放処分は、史家によれば、藩財政の危機打開のため尾張藩の内命を受けて行なった空米取引が、幕府のきびしい取締りに触れ、藩の犠牲となって罪を蒙ったものだという。(注4)

ということで、芭蕉は彼の身の上を大層不憫に思っていたようです。『野ざらし紀行』の中で、芭蕉は、「杜国におくる」と前書きして次の句を挙げています。

白げしにはねもぐ蝶の形見哉

芭蕉が杜国と別れたのは、杜国が追放となる四ヶ月前の貞享二年の四月ですが、杜国を白芥子に、芭蕉を蝶に喩えたこの句は、他の句に比して、あまりに激しい惜別の情を述べた句ではないかと思われます。また、芭蕉が、元禄三年正月十七日付の杜国への手紙で、長い間音沙汰のない杜国を非常に心配し、伊賀へ来るように望んでいること、宛名に「万菊丸様」と書いていることなどを見ても、他の門人への手紙などからは感じられない特別なものがあったように思います。ところが、身近な人の死に際して多くの追悼句を手向けている芭蕉が、その杜国の死に対して一句も残していないというのはどういうことでしょうか。保美の地で名を南喜左衛門と変えて隠棲していた杜国の身の上を慮った、と考えることもできますが、芭蕉が、句ではなく、杜国との思い出深い旅を、紀行文として、杜国追悼の意を以てまとめようとしたからだとも考えられるのではないでしょうか。そのようにして書かれたのが、すなわち、『笈の小文』であると思われるのです。

話を元に戻して、『笈の小文』を見てみますと、やはり尾形氏が言われるように、流謫の地に死した杜国への追悼の気持ちで書かれたのではないか、と思わせるところがあります。伊良古の地に感じられる貴種流離譚のイメージ(注5)を下敷きにし、能のワキ僧とワキツレとに擬して、「同行二人」の旅へと浮れ出るのですが、「旧友に奈良にてわかる」と前書し、「鹿の角先一節のわかれかな」の句を出した後、杜国の存在がまるで感じられなくなります。そして、舞台は『伊勢物語』『源氏物語』『平家物語』の幻想的な世界へと変化して行き、再び杜国の哀しい境遇が思い廻らされるのです。鉄拐が峯に登る処で、姿を消した杜国の代わりであるかのように、「導きする子」が登場しますが、芭蕉は、かつて義経を案内したという「里の童子」に、亡き杜国の俤を見ているのではないかという気がします。杜国の幻を見、ふかぬ笛の音をきいたのは、はかなき夢であり、平家滅亡の幻想と共に、やがて海の沫と消えて行きます。

芭蕉にとって、杜国の死は、非常に大きな出来事であり、悲しみのうちに幻住庵生活が始められたと考えられますが、その結果、出来上った『幻住庵記』からは、個人的な感情ではなく、風雅の道を歩もうとする芭蕉の決意が感じ取れます。しかし、杜国の死後一年を経た『嵯峨日記』において、杜国に対する思いが再び表わされるのです。『笈の小文』の須磨・明石の条に表わされた気分は、直接『嵯峨日記』の十九日の記述に繋がるものだと思われます。

『嵯峨日記』の記述を細かく見て行きたいと思います。十八日のところには、「文庫、白氏集・本朝一人一首・世継物語・源氏物語・土佐日記・松葉集を置、」とありますが、これらの書物は、意味もなく挙げられたわけではないと思います。十九日の「昭君村の柳、普女廟の花の昔」の記述は、「白氏文集」の「巫女廟花紅似レ粉、昭君村柳翠二於眉一。」からのものですし、二十九日には、「一人一首奥州高館ノ詩ヲ見ル。」とあり、「本朝一人一首」が出てきます。「世継物語」というのは、「栄華物語」なのか「大鏡」なのかわかりませんが、菅原道真が謫落せられたことが頭に浮かびますし、「大鏡」の中には夢の記述が目立ちますし、楊貴妃・王昭君・上陽人の名も見えます。「源氏物語」からは「笈の小文」の須磨・明石の感慨が思い起されます。「土佐日記」には、土佐が古くから遠流の地であることや、亡き児を悲しむ姿が描かれていること、「松葉集」は、「名所和歌集」ということから、「笈の小文」で「三河の国の地つゞきにて、伊勢とは海へだてたる所なれども、いかなる故にか、万葉集には伊勢の名所の内に撰入られたり。」と、「伊良古崎」のことを言ったことなどが思い出されます。芭蕉は、何気なく書名を挙げているようですが、これから書こうとするものがどういう内容であるか、を暗示する意味を持たせているのではないでしょうか。杜国の名は出されていませんけれど、書名から自然と杜国のことが思い浮べられ、十九日の記述で、清盛に排せられて嵯峨野に隠れ住んだ小督局と杜国の俤が重なり、この「平家物語」のイメージと、前に挙げた「源氏物語」とによって、「笈の小文」の須磨・明石の条の幻想的なイメージが、呼び覚されるような気がします。小督局は車琴で「想夫恋」を弾き、王昭君は琵琶を抱いて馬に揺られて行く、その悲しい身の上も、今は「うきふしや竹の子となる人の果」である。芭蕉はさぞ杜国の死を「憂き」ことと感じていたことでしょう。「西行物語」の「実行の中将の墓」の場面や、「ある女隠者」の話も思い起されるところです。そして、二十日の夜のところに、

去年の夏、凡兆が宅に伏したるに、二畳の蚊屋に四国の人

伏たり。「おもふ事よつにして夢もまた四種」と、

とあります。「去年」と言えば元禄三年のことです。杜国が亡くなったのが元禄三年三月二十日のことで、この日記の記述が元禄四年四月二十日、祥月命日ではありませんが、杜国の命日です。その上、『笈の小文』は、後にくるはずの布引の滝・箕面の滝・勝尾寺を前に入れて、貞享五年四月二十日の記事で終わっているのです。これは単なる偶然ではなく、芭蕉が意識的にしたことだと思います。二十日の日に芭蕉が思うことは、杜国のことでしょうが、芭蕉の見る夢はどんな夢だったのでしょうか。二十一日には、

今宵は人もなく、昼伏たれば、夜も寝られぬまゝに、幻住庵にて書捨たる反古を尋出して清書。

とありますが、この「幻住庵にて書捨たる反古」とは、一体『幻住庵記』のことなのでしょうか。井本農一氏は、

『嵯峨日記』中に、前年の元禄三年四月から七月まで滞在していた幻住庵で書き捨てた反古を取り出して、清書したという意味の記事があるのは、落柿舎に入って四日目の四月二十一日のことだが、この反古の中の一つに『笈の小文』を想定することは、必ずしも不当ではあるまい(『幻住庵記』の定稿が前年の八月に成っていたことは、『猿蓑』によって明らかである)。その場合、『笈の小文』の冒頭の部分と『芭蕉文考』所収「幻住庵記初稿」の末尾の部分の類似を考慮に入れるのもよいと思う。(注6)

と言われていますが、私も『笈の小文』をその反古として考えてもよいのではないかと思います。杜国の命日である二十日の夜に、前年の夏の夢の話を言い出したことから、杜国のことを思い出し、二十一日の夜に昨夜と変って一人になったことで、杜国への思い遣方なくて、『笈の小文』を取り出す気持ちになったということではないでしょうか。二十二日は、一人で、「さびしきまゝにむだ書してあそぶ。」と言っていますが、その内容を見てみます。

「喪に居る者は悲をあるじとし、酒を飲ものは楽あるじとす。」「さびしさなくばうからまし」と西上人のよみ侍るは、さびしさをあるじなるべし。又よめる

山里にこは又誰をよぶこ鳥
独すまむとおもひしものを

独住ほどおもしろきはなし。長嘯隠士の曰、「客は半日の閑を得れば、あるじは半日の閑をうしなふ」と。素堂此言葉を常にあはれぶ。予も又、

うき我をさびしがらせよかんこどり

とは、ある寺に独居て云し句なり。

芭蕉は「喪に居る者」ではありませんでした。けれど、杜国の死を「憂き」ことと思っていたために、ここに一人で居るためには、西行が詠んだように、「さびしさ」を主としなければならなかったのです。

二十五日には丈草が訪れ、漢詩を二つ残していますが、その後の方の一つを挙げます。

尋小督墳

強攪怨情出深宮
一輪秋月野村風
昔年僅得求琴韻
何処孤墳竹樹中

ここで、再び『平家物語』のイメージが甦るのです。次に、史邦と丈草の句を置いた後に、「黄山谷之感句」として次の詩句を引いています。

杜門蹇句陳無己　対客揶揄秦少游

上野洋三氏[注7]は、この詩句から、芭蕉は、客を謝絶する詩人と歓迎する詩人と、そのどちらでもない自分、「さびしさ（寂寞）」を心の前方に見つめながら、訪ねてくる人には、ひとりひとり心を動かし、浮きたつ自分を見つめていると言われます。また、二十二日に、木下長嘯子の『山家記』からの一文を引き、友人山口素堂が感心していた、という一挿話を置くのは、「むだ書き」らしさを加えて、一つの文章としての幅をもたせたものだとも言われるのです。私は、芭蕉が、『幻住庵記』で〝風雅に徹する芭蕉翁〟としての姿（ポーズ）を通すことに成功して、その姿勢を貫こうと思うのだけれど、杜国のことを思い出したりすると、一門人に対する個人的な悲しみなどを作品の中に言わんとする、自分の俗で未熟な部分を見出して、「うき我をさびしがらせよかんこどり」と言ったのだと思うのです。ですから、「客は半日の……」というのは、この言葉を出して、自分自身の心の中のことを言おうとしているのではないかと思います。「客は半日の閑を得れば、あるじは半日の閑をうしなふ」というが、自分の心の中に風雅でないもの（客）をほん少しでも住まわせると、心は風雅でなくなってしまうのだ、というのではないでしょうか。それで「憂き」ことを忘れて、「さびしさ」を心の主としようと心に決めるのですが、丈草の漢詩によって杜国の身の上を想起してしまったため、「黄山谷之感句」を言い出して、定まらない自分をどうしようもなく、もう一度見つめ直していたのではないでしょうか。門を閉じ来客をことわって推敲を重ねた陳無己の如く、風狂に徹しようという意識を持って書いた『幻住庵

記』、客を喜んで詩を書き与えた桑少游のように、徹し切れないで私情を露にした『嗟峨日記』、どっち付かずで中途半端なままの『笈の小文』。そういう風に言っているように思えるのです。そうして、とうとう二十八日に、

夢に杜国が事をいひ出して、涕泣して覚ム。

心神相交時は夢をなす。陰尽テ火を夢見、陽衰テ水を夢ミル。飛鳥髪をふくむ時は飛るを夢見、帯を敷寝にする時は蛇を夢見るといへり。睡枕記・槐安国・荘周夢蝶、皆其理有テ妙をつくさず。我夢は聖人君子の夢にあらず。終日忘想散乱の気、夜陰夢又しかり。誠に此ものを夢見ること、謂所念夢也。我に志深く伊陽旧里迄したひ来りて、夜は床を同じう起臥、行脚の労をともにたすけて、百日が程かげのごとくにともなふ。ある時はたはぶれ、ある時は悲しび、其志我心裏に染て、忘るゝ事なければなるべし。覚て又袂をしぼる。

と表白するに至るのです。この箇所について、上野氏(注8)は、

「杜国」の固有名詞は、二義的な意味以上に出ないのではなかろうか。

と言われ、さらに、

作者は、もうそれ以上に、杜国についても、この日の夢についても記述しない。

と言われます。が、私にはそのように思えないのです。杜国の夢を見たのは、二十日のところにも書いてあるように、思うことが杜国のことだったからで、どうして杜国のことを考えていたかというと、『笈の小文』の旅の時のことが忘れられないからだ、ということを自分自身で考えるだけでなく、芭蕉が、こうして言葉にして書いている、ということが、「二義的な意味以上に出ない」ことだとは、どうしても思われません。杜国への芭蕉の思いは、尋常なものではなかったようです。

此書記は、今度、於落柿舎、師(芭蕉)之御物語に而候。初而杜国子が行状承り、感涙に咽び候侭、師之口写之通、書候。許六に見可申存候。箇様之事は、後来若き衆之心得にも成可申と存、再写し贈遣候。

というのが、李由が千那・角上に宛てた手紙の、現在知られる部分だそうですが、五月一日に、恐らく入門のために初めて落柿舎を訪れた李由に、芭蕉が杜国のことを語ったことからも、その激しさが推察されます。

確かに、杜国の名前や、夢という言葉は、この後出てきませんが、二十九日、晦日のところに注目したいと思います。

廿九日　一人一首奥州高館ノ詩ヲ見ル。

「一人一首」というのは、『本朝一人一首』のことで、「奥州高館ノ詩」とありますが、『本朝一人一首』での本来の題は「賦高館戦場」です。ここで、「奥州高館ノ詩」とし、翌日にその詩の内容を挙げるということにも何か意味があるように思われます。この「奥州高館」という文字を見れば、すぐに『奥の細道』の平泉の条が思い出されるのではないかと思います。そしてもう一つ、「夏草や兵どもが夢の跡」の句が思い出されるのではないでしょうか。三度幻想的なイメージが甦える所です。夢を見た後だから「夢の跡」、と洒落ているわけでもありませんから、ここは、義経の悲劇的な運命に、若くして死んだ杜国の不幸を見ているのだと思います。それは、小督局のことを「うきふしや竹の子となる人の果」と言ったのと同じ心でしょう。

晦日　高館聳天皇似胃、衣川通海月如弓。
　　其地風景聊以不叶。古人とイへ共、
　　不至其地時は、不叶其景。

芭蕉は『本朝一人一首』の「賦高館戦場」の詩を挙げて、その描写が、『奥の細道』の旅で実際に見た風景と違うと言っています。それなら、芭蕉が実際に見た風景はどうだったのかということになり、その感慨はどのようなものだったのか、ということになるのですが、そういうことを言うだけならば、日日を変えて言わなくてもよいことです。勿論写実的に詠むべきだと言っているわけではなく、ただ美しい言葉を並べただけの、感興のない空虚な詩は、風雅ではないと言っているのだと思います。この考えは、芭蕉が『奥の細道』の旅から得たものだと思いますが、「其地風景聊以不叶。古人とイへ共、不至其地時は、不叶其景。」という言葉が出てきたのは、『奥の細道』の旅以来、自分が目指してきたものを思い出し、現在の自分に対する反省があったからではないかという気がします。翌日の五月一日に、芭蕉は、訪ねて来た李由に杜国の話をします。李由はその話を聞いて、「感涙に咽」んだと言っていますが、芭蕉は、李由に、自分と一緒になって杜国のことを悲しんでもらいたかったわけではないと思います。杜国をよく知る門人と共に悲しみたい、という気持ちもなかったでしょう。唯々杜国のことを言わずにはいられない、書かずにはいられない気持ちだったのでしょう。

　　竹ノ子や喰残されし後の霧　李由

私は、この句は、李由が芭蕉から杜国の話を聞いた後で作ったものだと思います。芭蕉の話の中に、「うきふしや竹の子となる人の果」の句のことが出たのではないでしょうか。李由が、小督局と杜国の身の上を重ね合せたかどうかはわかりませんが、喰残された竹の子というのは、人の果であるところの竹の子で、

後の露は、死後の涙だと思うのです。つまり、竹の子が食べられずに残されたのは、竹の子に、小督の変わり果てた姿(一周忌を過ぎた杜国)を見て、その人が死んだ後もその人のことを思って涙を流す、そういう気持ちからなのですね、という意味に取りたいと思います。

五月二日に曽良がやって来ます。彼は、芭蕉と『奥の細道』の長い旅を共にした人物です。芭蕉の思いは、再び『奥の細道』の旅に至り、自分の目指しているものに至ったのではないでしょうか。

五月四日、明日落柿舎を出るという日の記述を見ます。

宵に寝ざりける草臥に終日臥。昼ゟ雨降止ム。明日は落柿舎を出んと名残をしかりければ、奥・口の一間〳〵を見廻りて、

五月雨や色紙へぎたる壁の跡

「五月雨や」の句を、新潮日本古典集成の『芭蕉文集』では、こう訳しています。

果てしなく降り続く五月雨の陰鬱さ。そんな日に、名残を惜しんで見めぐる座敷の、色紙を剝ぎ取られた壁の跡形。それまでが妙に心にしみる思いがする。

日本古典文学大系の『芭蕉文集』の頭注には、

『笈日記』『喪の名残』『泊船集』は中七「色紙まくれし」。「へぎたる」は剝がしたの意。高木蒼梧(嵯峨日記贅語)はこの色紙を茶室の砂壁などに腰張する渋色の紙(渋色紙)のこととする。

とあります。まず、新潮日本古典集成の訳に、「果てしなく降り続く五月雨の陰鬱さ。」「色紙を剝ぎ取られた」としていますが、この日は昼から雨は止んでいますし、「まくれし」ではなく「へぎたる」なのですから、日本古典文学大系の注にあるように、「剝がした」だと思います。私は、この句は、「五月雨」に「さ乱る」の意をかけて、芭蕉が、落柿舎滞在中の自分の心の乱れのことを言っていると思います。心の乱れというのは、「雨」で「涙」を連想できることからも、杜国に対する思い、悲しみで心を痛めるという意味と取れますが、それだけではなく、理論と実践とのギャップによる苦悩でもあると思います。幾ら表現が雅なるものであっても、内容が個人的な感情に奔ったものであれば、真に風雅であるとは言えない、というような作品であるのが、『嵯峨日記』だと思うのです。それがわかっていながら、芭蕉は、個人的な感情(杜国への思い)を胸にしまっておくことができなくて、『嵯峨日記』を書くのです。それを書いてしまうことによって、心の乱れを取り去るのです。「色紙へぎたる」

とは、「『嵯峨日記』を書いた」ということで、芭蕉にとって、『嵯峨日記』は、一種カタルシス的な作品ではないかと思われます。『奥の細道』の旅以来目指してきて、『幻住庵記』で一応成功しながら、『嵯峨日記』ではどうしても徹し切れなかったこと、それは『笈の小文』の冒頭に言われる、「見る処花にあらずといふ事なし。思ふ所月にあらずといふ事なし。」だと思うのです。とすると、『嵯峨日記』は、「心、花にあらざる時」であり、「鳥獣に類す」べきものになるわけです。『幻住庵記』から、さらにもう一歩進んで、『笈の小文』に

しかも風雅におけるもの、造化にしたがひて四時を友とす。見る処花にあらずといふ事なし。おもふ所月にあらずといふ事なし。偸花にあらざる時は夷狄にひとし。心花にあらざる時は鳥獣に類す。夷狄を出、鳥獣を離れて、造化にしたがひ、造化にかへれとなり。

と言い得たのは、『嵯峨日記』を書いたからではなかったでしょうか。しかし、こう言い得たために、『笈の小文』は完成せずに終ってしまったとも考えられるのです。何故かと言うと、『嵯峨日記』が「鳥獣に類す」べきものなら、同様に、杜国への思いを以って書かれた『笈の小文』も、「鳥獣に類す」べきものとなり、相反するものを一つの作品にまとめようとしても、その作品は破綻してしまうことでしょう。松井氏(注9)は、

芭蕉は、杜国追悼を一つの動機として『笈の小文』を執筆し、その中には、杜国との楽しい思い出をふんだんに盛り込み、赤裸々な感情を表わしていったと考えられる。そして、杜国と共に楽しく過ごした道程は、ほとんどもらさず描写していったために、紀行としては未整理のものになってしまったとも考えられる。

こうして、杜国への思いを軸にした『笈の小文』が一応完成した後、芭蕉は再び紀行としての一貫性をもたせるために手を加え、旅人風羅坊の内面を軸とした『庚午紀行』を完成させたのではなかろうか。その時に、杜国の存在を抹消することを中心にして、全体のテーマにあわない表現を省略する方向をとったのではなかろうか。

と言っておられます。『笈の小文』を完成させようと思えば、杜国への思いを排除しなければならなくなりますが、それはかなり困難なことでありましょう。『庚午紀行』が芭蕉の手になるものかどうかは別として、無理にも『笈の小文』を完成させるなら、『庚午紀行』のような方法を取るしかないかもしれません。

五月雨や色紙へぎたる壁の跡

芭蕉は、古い自分を脱ぎ捨てて、新しい自分と新たな世界へ踏

み出そうとするのです。

（注）

1 『笈の小文』と『庚午紀行』（「近世文芸稿」28昭和六十年八月）

2 鎮魂の旅情―芭蕉『笈の小文』考―（「国語と国文学」昭和五十一年一月）

3 注2に同じ

4 注2に同じ

5 『万葉集』巻一23・24

6 『芭蕉の文学の研究』（角川書店。昭和五十三年）

7 『嵯峨日記』試論（「女子大文学」36昭和六十年三月）

8 注7に同じ

9 注1に同じ

なお、『嵯峨日記』『笈の小文』の本文引用は、岩波文庫による。